

指と伝達では、手話の体系化は一七六〇年世界で始めて聾啞学校を開設したド・レペー、わが国では京都(後大阪)盲啞院の古河太四郎。手話と指文字のちがいがいなど詳しく述べている。

本書は、日常気づかず使用している指について、更めて考えさせられる好著である。

(石原 理年)

〔新潟雪書房・新潟市浦山三丁目一―二十八、電話〇二五―二六七一九二〇五、平成四年九月十五日、A五判、二二二頁、定価二二〇〇円(税込み)〕

### 大塚恭男著『東西生薬考』

東西ともに本草書が博物的色彩の強いことから、本草書＝博物書というイメージが強い。とくに近時の博物学ブームに加えて環境問題も加わって、自然の恵みである自然物(博物)に対する関心が高まり、博物図譜や本草書の複製も盛んで、それらに対する解説書・研究書の類も少なからず出てきている。それにも拘わらず、本草書本来の目的だった筈の医療面から見る解説書は意外に少ないのが現状である。

いうまでもないことだが、ヨーロッパで印刷された初期本草書は、グーテンベルクの印刷出版で知られるドイツに最初に出現するが、その性格は「家庭薬草療法書」の目的のものだった。そこでは写生薬草図が載せられているのは、古代古

典の本草書、なかんづくアラビア医学に採用され後代に強い影響を与えたディオスコリデスの『ギリシア本草』収載の薬草類の多くが、ドイツ圏内に見られないというフロラーの相違から、実際の採薬旅行を経て写生された薬草が読者の理解を助長するため付図とされたためだった。

こうして古代古典に収載の薬草が中部ヨーロッパにほとんど見られないこと、古代古典はヨーロッパの全自然界を示すものでないこと、大航海時代の地理的知識の拡大と新世界からの自然物の新導入がルネサンス期ヨーロッパに博物学的開眼を促進し、新しい本草書編さんの機運を助長することになり、博物学的性格を深める結果になったとしても、本草書の主たる利用者は医療従事者だったことには変りはない。

東の中国でも版図の拡大から、王朝の替わる毎に種類を増した歴史本草書が出現し、本草文化遺産を伝承して医療面に貢献してきた。

薬理学を専攻した著者の育った環境から東洋の古典・生薬に直接ふれ目にする機会を持っていたこともあって、ドイツへ留学した機会に古典複製ブームに出会ったのも幸いして、一五―一八世紀の主要な西洋本草書を手し、医薬学を通じて東洋と西洋の文化史を探りたいと念願するようになったのは当然の成行だったに違いない。

こうして、人間にとって有用性のある自然物を豊富に収載する本草書本来の目的である医療面からの視点で、東西本草書に見える同類植物の記載を比較文化的に把え、簡明に論

考した本書は、正に書名『東西生薬考』にふさわしい内容となつてゐる。

本書は第一章に「東西伝統医薬の流れ」を据えて概説的導入を示し、ディオスコリデス、プリニウスの両本草書にトリカブト根とサソリとの拮抗関係（両者が保有する強い毒性が一緒に用いると相殺して無毒となる）を記載しているが、これと同様の認識が象形古文学の考証から中国書にも見られるという興味深い指摘もあつて、洋の東西に通ずる著者ならではの学識の一端をのぞかせてくれる。

第二章では、アイスランドゴケからレヴィステイクムに至る七十三種の生薬を五十音順に配し、個々の生薬の効能の東西比較、類似、異同、使用方法等を簡潔な表現で紹介しているが、記述内容は濃く、しかもその範囲は多岐にわたる話題を折り込んでいて、教科書風でないところが、著者の学識の深さと濃厚な人柄を読者に伝えてくれる。

東西本草書の単色図版を関連個所に配するとともに、美麗な図版を持つディオスコリデス『ギリシア本草』の「ウィーン古写本」の複製原色版図版と著者蔵本の中国明代の『本草品彙精要』の世界でも現存数少ない原色図版を多数配して、読者を本来の医療目的を知る東西本草書の世界に導き入れてくれる。

読んで有益な、見て楽しい好書である。

（宗田 一）

（創元社、大阪市北区西天満一―四―二、電話〇六一―三六三―二

五三一、平成五年二月、A5判、三二〇頁、定価八〇〇〇円）

### 森 重孝著『鹿児島島の医学』

琉球というサテライトをもつた薩摩の歴史にはかねてから興味をもっていたが、この度、森重孝先生が『薩摩医人群像』、『鹿児島島の医学史散歩』などについて、『鹿児島島の医学』を出版された。

私は食い入るようにこのサテライトの意味するもの、医学への影響の跡をさがし求めた。このサテライトは文化、科学の上陸地の選択、正確を期す上で大きな力があつたのではないだろうか。

歴代藩主の動き、一七七四年の医育機関の設立、葉草園など大きな影響を与えられているように感じられる。

就中、ペルシヤ、華佗と連動するやに云われる東洋の麻酔術秘法の伝達は興味深いものがある。秘中の秘として潜んでいたかのように察せられるが、その意味は深いものがあるであろう。

サテライトでの知識によるか、単なる地理的条件が主たる理由なのか解らないが、宮崎県と比較するとき、唐人医師の渡来は宮崎県では陸上から県南、都城地方に来ているし、唐人医師としてはこの地方に限局渡来した感がある。しかし、薩摩では殆んど全県全方位とみてよいようである。

南蛮医学、オランダ医学に於いても密なる接点があるよう